

中学校三年（当時小学校三年）

田中清子

昭和二十年八月六日、その日は忘れられない原爆の落ちた日です。今でもその時のことを考えると、身ぶるいがするようです。私は集団疎開に行かないで、近くの分教場で勉強していました。その日はお友達といっしょに近所に遊びに行きました。ピカ！と光った時、私は遊んでいた家の下じきになっていました。こうしてこのままここにいると、どうなるかわからない、とっていると、向うの方に少しすきまが見えたので、そこへはって行って、板を押しつけて外にはい出しました。外に出てみると、私が遊んでいた家だけだと思っていたのに、意外にも、どの家もどの家も、くずれたり、燃えたりしているのです。私はそのありさまを見ると、泣き出しそうになりましたが、泣いても元にはもどらないと思って、家に帰ることにしました。

ようやく家のところまでくると、母は一歳のあかちゃんを荷物の上にねかせて、一しょうけんめい荷物を道路にはこび出していました。あかちゃんは、びっくりしたためか気絶していました。お母さんは、私を見ると喜んで、「さあ、逃げましょう。いつまでもこうしていると、焼け死にますよ」と言って、荷物を背負い、赤ちゃんをだいて、私といっしょに逃げ出しました。目に大きな木のかげらがつきさきさきって、見えないのか、めくらめっぽうに走り廻っている人もいます。私たちは、どこということなしに、みんなが逃げていく方へついて行きました。比治山に行く途中、やけどが苦しくて、水槽や池の中にとびこむ人もいました。道ばたにすわりこんで、「水をかけてくれ」とか、「水をくれ」とか、たのんでいる人もいました。中には、道ばたのきたないどろ水をのんでいる人もいました。

私たちは、比治山にのぼる途中で、大きな木がまん中から燃えているのを見ました。山の上から下を見ると、あたりは一面の火の海でした。そして山の上には、あちらにもこちらにも、やけどや、けがをした人々が、苦しそうにうなりながら、ころがっていました。

それから段原の方に下りました。段原は燃えてはいなかったが、家という家は、ほとんどみなくずれていて、たおれていない家の中は、がらんどろでした。げんかんの下駄（げた）がおいてあったので、はだしで逃げてきた人たちは、それをはいてまた逃げていきます。少し行くと、メガホンをもってさけんでいる人がいました。ひがいを受けた者は、皆似の島（にのしま）に行けということでした。私たちも、そこに行くことにして、川から船に乗りました。

お母さんのすわっている前に、私と同じ年くらいの女の子がいました。その女の子は、体中にやけどや、けがをしていて、血がながれていました。苦しそうに母親の名ばかり呼んでいましたが、とつぜん私の母に、

「おばさんの子供、ここにいるの？」

とたずねました。その子供は、もう目が見えなくなっていたのです。お母さんは、

「おりますよ」

と返事をしました。すると、その子供は

「おばさん、これおばさんの子供にあげて」

と言って、何かを出しました。それはおべんとうでした。それは、その子供が朝学校に出かける時、その子供のお母さんがこしらえてあげたおべんとうでした。お母さんが、その子供に

「あなた、自分で食べないの？」

と聞くと、

「私、もうだめ。それをおばさんの子供に食べさせて」

と言ってくれました。私たちは、それをいただいた。しばらく川を下って船が海に出た時、その子供は

「おばさん、私の名前をいうから、もし私のお母さんにあったら、ここにおるといってね」

と言ったかと思うと、もう息をひきとって死んでしまいました。私は、その子供がかわいそうでかわいそうでなりません。私はお母さんと一しょに泣きました。今その子供が生きていたら、どんなにうれしいかわかりません。

似の島について、しゅうよう所にはいると、そこは、けがや、やけどをしている人でいっぱいでした。中には、気ちがいのようになって、かん者の中を走りまわる人もいました。今それらの人が、やけどや、けがをしていなかったら、そして生きておられたら、そしてまた、船の中にいた子供がやけどをしなくて生きていて、その子供のお母さんにあうことができたなら、私はどんなにうれしかったことでしょう。

出典「原爆の子 広島の子のうたったえ 上」長田新編 岩波書店 平成二年(一九九〇年) 二五五～二五八ページ

【原文中には、職業、境遇、人種、民族、心身の状態などに関して、不適切な表現が使われていることがあります。昭和二十六年(一九五一年)に書かれた貴重な資料であるため、原文を尊重しそのまま掲載しています。】